

筑波大生のレポートにおける 参考書式について

中村 紗彩

本研究の目的は筑波大学内でのレポートの書き方の指導の実態とその参考書式の記述内容を明らかにすることである。筑波大学は総合大学であることに加え、2021年度から総合学域群を導入し、初年次教育に力を入れている。総合学域群に所属する学生は、受験科目により「文系」「理系I」「理系II」「理系III」と分けられて入学し、所属する学生は2年次に進学する際に進学する学類が確定する。総合学域群の誕生により、大学として専攻の定まっていない学生の存在を肯定しており、その教育のためには、なんらかの対策がなされていることが考えられる。本研究では筑波大生がレポート作成時におかれている環境を明らかにするために、「大学生が利用すると考えられる図書での指導の実態を明らかにすること」、「筑波大学におけるレポートの書き方・引用書式の教育の現状を明らかにすること」の2点の研究課題を設定した。

本研究では筑波大学内でどのように書式について指導しているのか、という点に重点を置き、大学生が置かれている環境を調査するため、2つの側面から調査を行う。第一に文献調査を行い、学生向けに記述されている資料の記載を調査する。第二に、筑波大学で開講されている授業のうちレポートの書き方について扱った授業の指導内容をスノーボールサンプリング方式で調査を行う。

第一の課題については、特定の書式について扱う図書は少なく、著者オリジナルの記法を提言するものが多いことが明らかとなった。主にアメリカで用いられている書式を日本語訳して用いる際に、ズレが生じる。その結果、日本国内には「どこを日本語に合わせるか」「それらの要素をどのような順番に並べるか」といった要素が組み合わさることで「特定の書式に属さない」書式が大量に発生していると考えられる。

第二の課題については、レポートの書き方等の授業が開講されている科目は少なく、学生は授業において参考書式についての指導をあまり学ぶ機会がないことが明らかになった。多くの学類では演習の授業などで、同じ内容のレポートを複数回提出するレポート課題の際に赤入れがなされ、初めて「書式」を学ぶことが多い。その多くは添削型の指導であり、規格を示す授業は少数である。

一方で、レポートや論文を記述する際の標準化を目的に科学技術振興機構(JST)が科学技術情報流通規格(SIST)を制定していることの認知は薄いといえる。授業では知識情報・図書館学類、障害科学類の2授業のみ登場し、文献調査でも49冊のうち5冊、4名の著者のみ見られた。

1993年に日本科学技術情報センター 技術開発部によって行われたSIST02、07、08の普及状況調査では既に全体として約7割の項目についてSISTに準拠していることが判明している。

このことから、どの分野にも適応しやすいSISTを用いて、大学としてレポートに関する教育を強化する必要性があるといえる。

(指導教員 逸村裕)